主な行先標示分類表

（表2）

	年　代	大　山	観音札所	伊勢原	その他	面横計
江戸時代	1600～　2基	0面	1面	0面	149面	
	1700～32基	12	13	5		
	1800～39基	14	21	7		
	年不詳24基	9	5	5		
小計	**97基**	**35**	**40**	**17**	**149**	**241面**
明治	1867～11基	5	2	1	21	
大正	1912～5基	2	0	4	18	
昭和	1926～0基	0	0		0	
小計	**16基**	**7**	**2**	**5**	**39**	**53面**
合計	**113基**	**42面**	**42面**	**22面**	**188面**	**294面**

＊合計欄の行先標示大山、観音、伊勢原、その他総計が**294面です。**

＊江戸時代のその他は、行先面数が多く年代別分類は不可能なので一括にした。

坂東三十三観音札所

（表3）

番号	寺　院　名	所　在　地	番号	寺　院　名	所　在　地
1	**杉本寺　（杉本観音）**	**神奈川県鎌倉市**	18	中禅寺　（立木観音）	栃木県日光市
2	**岩殿寺　〈岩殿観音〉**	**神奈川県逗子市**	19	大谷寺　（大谷観音）	栃木県宇都宮市
3	**安養院　（田代観音）**	**神奈川県鎌倉市**	20	西明寺　（益子観音）	栃木県益子町
4	**長谷寺　（長谷観音）**	**神奈川県鎌倉市**	21	日輪寺（八幡山観音）	茨城県太子町
5	**勝福寺　（飯泉観音）**	**神奈川県小田原市**	22	佐竹寺　（北向観音）	茨城県常陸太田市
6	**長谷寺　（飯山漢音）**	**神奈川県厚木市**	23	正福寺　（佐白観音）	茨城県笠間市
7	**光明寺　（金目観音）**	**神奈川県平塚市**	24	薬法寺　（雨引観音）	茨城県桜川市
8	**星谷寺　（星谷観音）**	**神奈川県座間市**	25	大御堂（大御堂観音）	茨城県つくば市）
9	慈光寺　（慈光寺観音）	埼玉県比企郡ときがわ町	26	清龍寺　（清瀧観音）	茨城県土浦市
10	正法寺　（巌殿観音）	埼玉県東松山市	27	円福寺　（飯沼観音）	千葉県銚子市
11	安楽寺　（吉見観音）	埼玉県比企郡吉見町	28	龍正院　（清河観音）	千葉県成田市
12	慈恩寺（慈恩寺漢音）	埼玉県さいたま市	29	千葉寺　（千葉寺観音）	千葉市中央区
13	浅草寺　（浅草観音）	東京都台東区浅草	30	高蔵寺　（高倉観音）	千葉県木更津市
14	**弘明寺　（弘明寺観音）**	**神奈川県横浜市**	31	笠森寺　（笠森観音）	千葉県長生郡南町
15	長谷寺　（白岩観音）	群馬県高崎市	32	清水寺　（清水観音）	千葉県いすみ市
16	水澤寺　（水澤観音）	群馬県渋川市	33	那古寺　（那古観音）	千葉県館山市
17	満願寺（出流山観音）	栃木県栃木市			

＊県別札所数　　**太字は神奈川県内**

江戸期の伊勢原村の賑わいと歴史
―道標が証明する「伊勢原はこんなに素晴らしい町なんだ」―

はじめに

令和２年（２０２０）の今年、「伊勢原開村四百年」元和６年（１６２０）から四百年になる。また「大山詣り」が平成２８年４月１９日に日本遺産に認定された。これは伊勢原市にとっても、我々市民にとっても大変うれしい事である。

私は大山道に非常に興味を持っている。大山道を歩き、多種多様な大山道標を見て感激した。しかし道標には大山道だけでなくいろんな場所を標示した多くの道標があることを知った。道標は今でいう道路標識であり、道標イコール道と言える。それでは伊勢原市内には道標がいくつあるのだろうかと気になった。道標を知ることで、伊勢原開村の意義と発展が解るのではないか。伊勢原村の発展が近隣他村と、何処が、何が違うのか、市内の道標を調査分析して昔の伊勢原村を浮かび上がらせてみたいと思った。幸いに伊勢原市教育委員会文化財課で調査した貴重な資料があった。それは「再発見大山道調査報告書・伊勢原市内の大山道と道標」（教育委員会編）である。良かったのは大山道標だけでなく、総ての道標が調査されており市内の古道が解る。伊勢原の古道の調査をするのに最高の資料である。これを調査分析することで、江戸時代の伊勢原村の繁栄の様子が良く分かるのではないか。

そして調査分析した結果、驚きであった。伊勢原村の発展が大山詣だけではない、いろんな要件、目的に依る人々の交流が他村より多くあり、それが今の伊勢原市につながったと言っても過言ではないと確信できたのだ。

江戸時代に造られた道標はもう立てられる事はない。道標は過去の伊勢原の古道を証明する貴重な遺産で文化財に値するものである。これを考えると道標調査資料を作製した教育委員会の先見性と洞察力に感謝である。

1、伊勢原開村の概要

①村から市への流れ

元和六年（１６２０）に大竹村の秣場（まぐさば）に開村した伊勢原村は、**令和二年（２０２０）には伊勢原市として存在し四百年**になる。開村時の伊勢原村は石高四七石の当時近隣三十数村もある中で一番小さな村であった。それでは何故、江

戸幕府は江戸時代以前からの古い村落が多くあったのに、石高も少ない伊勢原村を開村したのか？それがなぜ伊勢原の名で残り村から町、そして市へとなっていったのであろうか。そこには何か大きな要素、意義があったと思われる。

そして**現在の伊勢原市**は江戸時代の**大住郡三十三ケ村**を吸収合併した市域により成り立っている。

大住郡三十三ケ村は今も地名は残るが、次の村である。

石田村、見附島村、下落合村、小稲葉村、上谷村、下谷村、沼目村、上平間、下平間村、田中村、大竹村、伊勢原村、板戸村、馬渡村、大句村、善波村、串橋村、笠窪村、白根村、神戸村、坪之内村、三之宮村、栗原村、（後に三之宮村に合村）上子安村、下子安村、坂本村、日向村、上粕屋村、下糟屋村、東富岡村、西富岡村、粟久保村、高森村

＊「伊勢原市史・ダイジェスト版（伊勢原市教育委員会）」。参照

江戸幕府の崩壊により明治政府が成立すると江戸時代の村方三役、五人組等の制度の改革を行うべく明治二十一年町村制が発布され、翌明治二十二年四月一日に近辺の村々を合併し、次の二町五村が編成された。

伊勢原町＝伊勢原村、田中村、大竹村、板戸村、沼目村の一部の池端を併合

大山町＝坂本村（大山）、子易村

高部屋村＝西富岡村、上粕屋村、日向村、

比々多村＝三之宮村、神戸村、坪之内村、善波村、笠窪村、串橋村、白根村、

成瀬村＝石田村、高森村、東富岡村、粟窪村、下糟屋村、見附島村、下落合村、

大田村＝沼目村、上平間村、下平間村、上谷村、下谷村、小稲葉村、

岡崎村＝七ケ村が合併した村だが大句、馬渡等飛び地を持つ複雑な地域であった。

第二次世界大戦終了後、行政事務の簡素化を図るため、多すぎる町村を合併することになり昭和二十九年十二月一日に岡崎村を除く二町四村の合併が施行され、伊勢原町の名称で新しく誕生した。その後、昭和三十一年九月三十日に岡崎の大句、馬渡が伊勢原町に分合された。

さらに昭和三十九年の東京オリンピックを迎えるに当たり、東京近郷の伊勢原町には国道２４６号線や東名高速道路が開通し、小田原厚木道路も造成された。伊勢原町も工場の誘致や住宅団地の建設等町づくりが進められた。そして住民も増え昭和四十六年三月一日、県下十五番目の市としての伊勢原市が誕生したのである。

②江戸幕府の構想

慶長五年（１６００）関ヶ原の合戦で勝利した家康は、早くも翌年慶長六年に東海道に宿駅伝馬制を設け江戸を中心に東海道、中山道、奥州道中、甲州道中、日光道中の五街道を開いたとある。「かながわの古道(阿部正道著　かもめ文庫)」

家康は平塚宿北方の中原に御殿をつくり、江戸入城の際は人の往来の激しい東海道を使わず、江戸虎ノ門を結ぶ中原街道を主に使ったという。そして中原御殿を拠点にしていろいろ施策を行った。

また鷹狩りも行い伊勢原では日向、上粕屋、西富岡、高森、善波方面にも往来し、千手原を通り矢倉沢往還（古東海道・足柄古道）も利用したと思える。そしてこの道が大山参詣、日向薬師参り、観音巡礼等の信仰の他、旅人、商人などの往来が多い事、また駿河にも繋がる利便性、重要性を再認識し矢倉沢往還として整備した。そして矢倉沢往還と東海道を結ぶ交通の要衝の地として千手原に伊勢原開村を考えたに違いない。

私説だが、家康はその構想を将軍秀忠や幕閣にも話していたと思われる。

開村はあくまでも幕府の政策であり、二代将軍秀忠は中原代官成瀬五左衛門に開発に相応しい人材を探すよう求めていたのではないか。そこで成瀬五左衛門と幕閣らは、鎌倉の古都や寺町及び信仰の都である伊勢の認識に詳しい民間人に湯朝清左衛門と山田曾右衛門の二人を選び開村を命じたと考えられる。二人の間には開村を巡りいろいろ軋轢が生じたであろう。今に残る「当村草訳立初覚」にその経緯が載っていて、今でもその内容について議論されている。

しかし、その後の江戸時代は戦の無い平和な時代となり矢倉沢往還は庶民の道、産業の道として繁栄していったのである。

＊通説となっている湯朝清左衛門と山田曾右衛門の伊勢原開村説であるが、これは「当村草訳立初覚」の内容に基づいていると思われるが、常識的に考えて、大山参詣帰りの無名な一個人が、水音を聞いて開村に相応しいと幕府の役人に頼んで簡単に許可されるとは考えられない。その信憑性については諸説あり、諸本に記述されているのでここでは述べない。

③伊勢原開村は矢倉沢往還があったから

矢倉沢往還として整備された足柄古道（古東海道）は、現在の伊勢原市内を通る歴史の道で、（＊江戸時代は田中村、板戸村等を通る）伝説上の英雄、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東征に向かった道であり、壬申の乱で敗れた大友皇子も日向の山中へ逃れる時足柄峠を越えたと思われる（伝）。　また多くの防人も大山を眺めながら西へ向かった様子が万葉集に残る。更に国司（役人）が勤務地(国府)へ向かった官道でもある。その為か種々の歴史的文化財、遺跡、古墳等が市内に残る。延喜式神名帳には比々多神社、高部屋神社、阿夫利神社の三社が足柄古道の沿線にあるのもその由縁であるが、秦野には一社も無い。伊勢原に三社もあるのは稀有なことである。大山を抱える伊勢原の地形的魅力からか。

江戸時代になると徳川幕府は日本橋を起点とした五街道を整備した。その他に足柄古道の重要性を鑑み東海道の脇往還、裏街道として整備されたのが矢倉沢往還である。この道は江戸赤坂見附から青山を通り、二子多摩川を渡り相模の中央を抜け足柄峠を越えて駿河国沼津宿に至る道で、矢倉沢に関所を設けたことから矢倉沢往還と呼ばれるようになった。そしてこの矢倉沢往還は江戸の経済、文化の発展になくてはならない重要な道となったのである。

伊勢原市内では、道がほぼ矢倉沢往還に沿って残っている。(絵図参照)　明治に入ってからは東京沼津線と呼ばれ使われていたが、戦後の高度成長期に車道として整備されていった。今は国道２４６号線として拡張造成され昔の街道としての面影は無くなった。しかし伊勢原市内では幸いに国道２４６号線が矢倉沢往還と重なり整備された距離は少なく、並列に造成されており旧道の残っている場所が多い。その古道は伊勢原の文化財として貴重な道である。

足柄古道を矢倉沢往還としての整備造成があったからこそ伊勢原村が誕生したと私は思っている。したがって江戸から現在までの伊勢原市の発展は矢倉沢往還を抜きにしては語れないであろう。

江戸時代には大山詣、日向薬師詣、三之宮比々多神社、観音巡礼等の信仰、その他米市場、秦野の煙草、厚木のアユ、木炭等の運搬の為にも利用された道で、この矢倉沢往還から信仰の道、生活の道、産業の道として新たに各方面に枝分かれして延びていった道もたくさんできた。それを思い想像すると、江戸時代の伊勢原村は、現在の伊勢原市の数十倍の活気があり近隣を凌いだと思われる。したがって伊勢原市は鎌倉に次ぐ多くの史跡や文化財が残っていると言っても過言ではない。

しかし、我々伊勢原市民はこの矢倉沢往還や大山道、観音道等が市内の何処を通っているか知っているのだろうか。この道の一部でも史跡等に指定されて保護されているだろうか。この事は郷土歴史関係者等の一部の人達しか知らない。市民の